

場所の記憶の想起による協力行動の促進に関する研究

東北大学 学生会員 ○李子羸

東北大学 正会員 青木俊明

東北大学 学生会員 安思奕

1. はじめに

近年、少子高齢化をはじめとした地域問題がより深刻化している。また、住民のニーズの多様化に伴い、従来型の行政だけでは地域の課題に対応することが難しくなっています。そのため、地域住民間の共助の重要性が高まっている。しかしながら、共助をはじめとする協力行動を促すことは容易ではない。そのため、住民間の共助が増えれば、住民が自ら問題の解決を図れる場面も増えるため、住民の協力行動促進策を検討することは大きな社会的意義を持つ。

住民に協力行動を促す方策の一つとして、場所の記憶の活用が挙げられる。場所の記憶というのは、人の自伝的記憶の中の場所と関わった経験である¹⁾。Scannell ら（2010）によると、場所の記憶は地域愛着を醸成する機能を持つ。地域愛着が高い人ほど、地域での活動に熱心である傾向が示すことが報告されている²⁾。また、多くの人が経験する出来事は、多かれ少なかれ、体験場所と関連していると言える。槻橋ら

（2014）佐藤ら（2018）は複数の復元模型ワークショップを開き、住民たちを場所の記憶を収集した。結果的には、一人あたり2か所以上の記憶の残る場所を思い出せることが分かった。そのため、多くの人が持っている“場所の記憶”を活用することにより、その場所に関連した協力行動を促すことが期待できる。

そこで、本研究では、質問紙調査を行い、場所の記憶の想起が、地域愛着の向上を通じて、地域への協力行動を促進することを検証する。その上で、住民が積極的に協力行動を行うための方策を検討する。

2. 研究仮説

（1）場所の記憶の想起と地域愛着

場所の記憶の想起は地域愛着に及ぼす影響についても各所の知見が報告されてきている。田宮ら（2020）は群間比較質問紙調査を実施し、肯定的な場所記憶の想起によって場所愛着およびその場所と関係が強い地域への愛着が強化される結果を報告している。Ratcliffe ら（2016）³⁾はフィンランド人の被験者にフィンランドの中で最も好きな場所に関わった記憶を想起させた後で、記憶想起の特徴と地域愛着を計測した。その結果、記憶想起の再体験感と地域愛着の間に正の相関関係があることが分かった。以上で概観したように、ポジティブな記憶の想起が地域愛着に正の影響を及ぼすことは明らかだ。本研究では、中立的な記憶と消極的な記憶も含めて、三種類の記憶の想起による異なる影響を検討する。

また、地域アイデンティティは地域愛着の下位変数の一つとして、居住地域によって異なり、田舎の住民は都市部の住民よりも地域アイデンティティを形成しやすい⁴⁾。これを考慮した上、本研究では、都市部と田舎の住民の地域アイデンティティの形成メカニズムを比較して分析する。

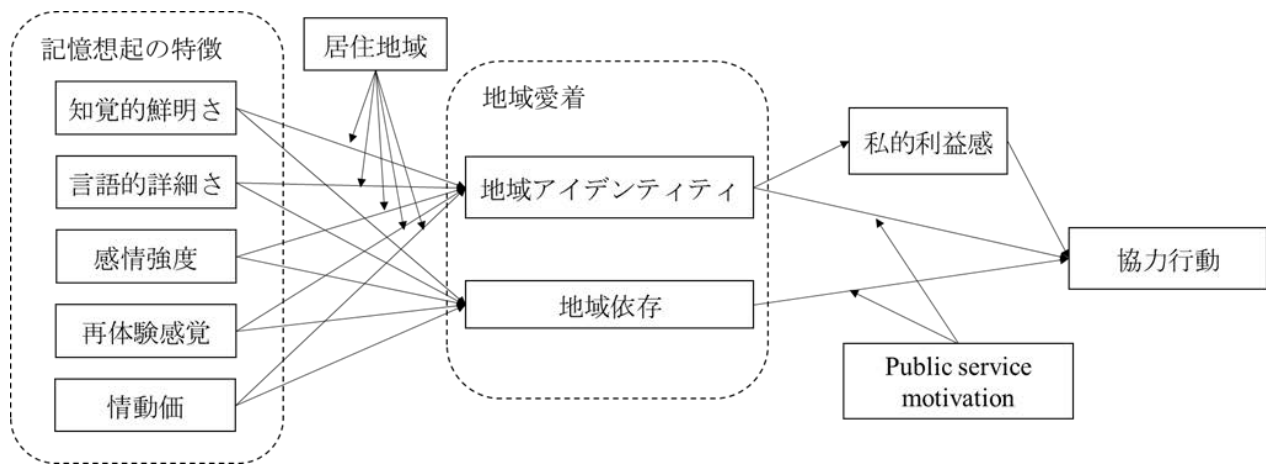
（2）協力行動の規定要因

協力行動の規定要因として、“地域愛着”が注目されている。鈴木ら（2008）の研究に地域愛着が高い人ほど、地域への活動に熱心である傾向が示された。加えて、“Public service motivation”は公共の利益を貢献するように個人を動機づける力であり、地域愛着と協力行動の相関関係を強化されると予想される。

一方、私的利益感も協力行動の規定要因である。合理的行動理論（Theory of Reasoned Action）によると、協力行動に対する態度は、その行動の結果に対する評価によって影響を受けるものと想定されている。安藤ら（1999）によれば、個人において、協力行動によって得られる便益が高いと評価されているほど、協力的行動が促進される傾向にあることが確認されている。さらに、地域アイデンティティとは場所に関する自己のカテゴリー化である。地域アイデンティティが高い人ほど、自分が住んでいる場所を自分の一部のように感じ、地域全体の利益を自分の利益と見なす傾向にある。そして、地域への協力行動に積極的に参加すると想定される。これらの前提を踏まえ、本研究の仮説モデルを図-1に示す。

キーワード：場所の記憶、協力行動、地域愛着、公共心、社会的ジレンマ

連絡先：〒980-8576 仙台市青葉区川内 41



図－１ 仮説モデル

3. 方法

本稿では、質問紙実験を行い、上記仮説モデルを検証する。

実験は、居住地域（都市部・田舎）×場所の記憶（ポジティブな記憶・中立的な記憶・消極的な記憶）の2×3の要因配置実験として行う。居住地域については、都市部と田舎を設定した。これは、Daniel（2021）が田舎の住民は都市部の住民よりも地域アイデンティティを形成しやすいことを報告しており、地域アイデンティティが協力行動に影響を及ぼすことが予想されたためである。居住地域によって、地域アイデンティティの大きさとその影響力が異なると推察されることから、2つの居住地域を想定した。なお、都市部とは、5万人以上の市と政令指定都市であり、田舎とは、5万人未満の町村を想定している。

次に、場所の記憶については、想起時の感情特徴に基づいて、ポジティブな記憶・中立的な記憶・消極的な記憶の3つに分類した。ポジティブな記憶とは、思い出すときにポジティブな感情(例えば喜び)が生まれる記憶であり、中立的な記憶とは思い出すときに感情状態が変化しない記憶である。消極的な記憶とは、思い出すときに消極的な感情(例えば怒り)が生まれる記憶である。

協力行動については、Tyler（2001）は集団存続に重要となる3タイプの協力行動を提唱している。すなわち、それぞれが“集団のために働くこと”、“集団ルールに従うこと”、“集団に留まること”、の3点である。これらを踏まえるとともに、本研究では地域住民に注目していることから、“まちづくりへの参画”、“地域ルールに従うこと”、“現居住地に定住すること”、の3点を協力行動として検討する。

実験手順については、まず質問紙の提示文を通じて、各群の被験者に対応する種類の記憶を想起してもらうように要請する。その上で、この記憶をさらに想起してもらうために、先ほど思い出した出来事について具体的に記載するように要請する。その後、質問項目を答えてもらう。質問項目では、主に「記憶想起特性（5項目）」、「地域愛着（2項目）」、「私的利益感（3項目）」、「協力行動（3項目）」と「Public service motivation（4項目）」の五つの構成概念について5件法で計測する。変数毎に平均値を合計し、それを変数の評定値として分析を行う。

4. 結果と考察

まず、共分散分析を行い、場所の記憶の想起が地域への協力行動を促進するメカニズムを検証する。次に、群間比較を行い、条件別に構造モデルを作り、差を分析する。結果は当日に公表する。

参考文献

- 1) Maria Lewicka : Place attachment, place identity, and place memory: Restoring the forgotten city past, Journal of Environmental Psychology, 28, 209-231, 2008.
- 2) 鈴木春菜, 藤井聡 : 地域愛着が地域への協力行動に及ぼす影響に関する研究, 土木計画学研究, 25(2), 2008.
- 3) Eleanor Ratcliffe, Kalevi M. Korpela : Memory and place attachment as predictors of imagined restorative perceptions of favorite places, Journal of Environmental Psychology, 48, 120-130, 2016.
- 4) Daniel Belanche : Local place identity: A comparison between residents of rural and urban communities, Journal of Rural Studies, 82, 242-252, 2021.